

大歳神社（柏尾）の建造物（本殿・拝殿）と由緒

岸 泰子

2016年度文化遺産学フィールド実習において神河町（旧神崎町）柏尾地区の大歳神社の調査を実施した。本節では、その大歳神社の本殿・拝殿の建築的特徴を解説し、さらに諸説ある境内の建造物の由緒について整理する。なお同実習では学生が本殿・拝殿の平面の実測と平面図の製図（清書）をおこなった。学生が作成した本殿・拝殿平面図は83頁に掲載しているので、あわせて参照されたい。

1 本殿・拝殿

本殿 一間社流造 軒唐破風付 檜皮葺 19世紀後期
円柱 切目長押 内法長押 頭貫 木鼻 台輪留め 三斗枳肘木 実肘木 中備臺股 二軒繁垂木 妻飾虹梁大瓶束 庇角柱 虹梁形頭貫 木鼻 連三斗 実肘木 繫海老虹梁 手挟 中備龍彫刻 二軒繁垂木 軒唐破風妻飾波兎彫刻 三方樽縁 勿高欄 脇障子 木階五級 浜床 浜縁

拝殿 桁行三間 梁間二間 入母屋造 棧瓦葺 19世紀中期
角柱 正背面中央虹梁 組物なし 中備なし 一軒疎垂木 妻飾木連格子

柏尾地区の大歳神社は、大嶽山の南麓に位置する。境内には、本殿のほか、拝殿、祠、鳥居、神輿蔵がある。

本殿は、標準的な規模の一間社流造の建物である。構造形式も標準的であるが、細部の装飾は丁寧な作りにあつてある。虹梁の絵様は先端に玉が付く若葉を複雑に組み合わせた意匠である。身舎の正面の両小脇板には菊・葉紋の彫刻が付く。庇は木鼻を獅子、中備を龍の彫刻で飾り、それらの彫刻を彩色する。手挟の彫刻も複雑である。正面を飾る軒唐破風の妻飾は波と兎の意匠の彫刻を入れる。なお、今回は身舎の内部は確認していない。

建設年代を示す史料はないが、絵様から19世紀後期の建設であると思われる。保存状態は良好である。

拝殿は、本殿の前に立つ比較的小規模な建物である。正面の中央間は開放とし、背面中央間には格子戸を入れる。それ以外は腰壁を入れて上部を開放とする。正・背面の中央間には虹梁を架ける。内部の天井は棧縁天井を張る。組物や中備を入れない簡素な形式の建物である。小屋組は未確認である。

正面に付く石階の側面にはこの石段の寄進者と寄進年月が彫られていて、年代は大正2年とある。この石段が付く前の階段の痕跡は現状からは確認できないが、形態からみて後補であろう。ほかに改造はない。

建設年代を示す史料はない。拝殿内部には絵馬が掛かる。これらが寄進された年代は、安政2年・7年、嘉永7年、文久元年、明治40年である。一方、虹梁の絵様は19世紀中期の特徴を有しており、部材の風蝕もある。以上から、建設年代は19世紀前期と判断した。

2 建造物の由緒

柏尾地区の大歳神社の建造物については、地元では柏尾地区の法性寺境内もしくは愛宕大権現堂周辺にあった神社（建物）を近代に移築したと伝わる。一方、平成16年度に実施された旧神崎町の寺社建築の調査の成果をまとめた『神河町の寺社建築—旧神崎町域—』（神河町教育委員会、平成18年、以下『神河町の寺社建築』）ではその由緒は「福本大歳神社の御旅所」と記される。

この『神河町の寺社建築』の記述は、『神崎郡誌』の福本地区の大歳神社の解説に依拠しているであろう。『神崎郡誌』は「神社調書」を引用しており、江戸時代には福本の大歳神社の祭礼では二基の神輿が氏子部落である福山・貝野を経て柏尾区の「御旅所」に一時泊るとある。加えて、今回の調査において柏尾地区が所蔵する江戸後期の柏尾村の絵図を確認した。これを見ると、現在の大歳神社の位置に神社が描かれている。この絵図にはほかに神社の表記はない。

以上から、江戸時代後期には現在の大歳神社の場所に福本の大歳神社の御旅所があったとみてよく、今回の実習で実測した19世紀中期建設とみている現存の拝殿に福本の大歳神社の神輿が留まっていた可能性が高いということになる。

一方、地元で伝わる愛宕大権現堂近くにあった神社を移築したという説については、現在の本殿・拝殿に移築の痕跡を確認できなかったため、根拠は不明であると言わざるを得ない。なお、『神崎郡誌』には、福本地区の大歳神社は明治44年に柏尾の愛宕神社と大歳神社を合祀し、その後大正2年に福本村から大黒村の旧藩邸跡に移転したとある。推測の域は出ないが、これらの事柄が混同して、本神社の建物の由緒として地区に伝わっているのではないだろうか。

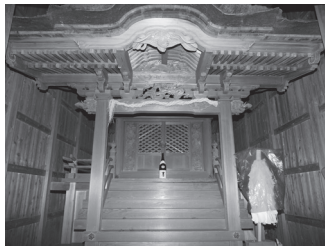


写真1 本殿正面



写真2 本殿側面



写真3 本殿庇見返し



写真4 本殿庇詳細



写真5 本殿軒唐破風妻飾



写真6 拝殿正面



写真7 拝殿側背面



写真8 拝殿内部

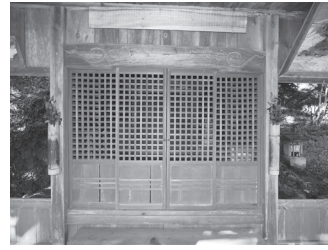


写真9 拝殿背面虹梁



写真10 拝殿正面石階左側面銘文

法性寺毘沙門堂の戸板裏書と津山愛染寺

東昇

法性寺境内の毘沙門堂にある戸板の裏書は次のように記されている。

此造作、文政五壬午年閏正月朔日より同四日迄二成就ス

大工三木郡藤原忠治郎、願主作州津山西寺町高室山愛染寺快教法印、浄本房敬白

此僧従明石来当時世話人也

この裏書は、文政5年（1822）閏正月の造作に関する記録である。後半の願主美作津山愛染寺に関して、津山郷土資料館・津山市史編さん室小島徹氏よりご教示いただいた。この愛染寺は、現在もこの記述と同じ津山市西寺町に現存する寺院で、慶長10年（1605）快雲によって創立された、法性寺と同じ古義真言宗である。もとは高室山愛王院金剛寺として、藩主森家の庇護を受け、延宝年間（1673～1681）に愛染寺と改称した。明治9年（1876）に正保元年（1644）建立の仁王門兼鐘楼門（市指定重要文化財）を残して、本堂などが焼失したため記録が残っていない。

裏書の快教は、愛染寺住職第6世、美作出身、上森原極楽寺（岡山県鏡野町）住持の後、愛染寺に移り中興の祖とされ、延享2年（1745）3月12日に示寂している（津山郷土史料館所蔵矢吹家弓齊叢書154-4）。裏書の文政5年と快教の活動時期は約1世紀程離れるため、明石から来た世話人の浄本房は、快教の弟子などの系列に関係する人物と考えられる。

参考文献

文化財保存計画協会編『津山市指定重要文化財愛染寺仁王門兼鐘楼保存修理報告書』愛染寺、2004年

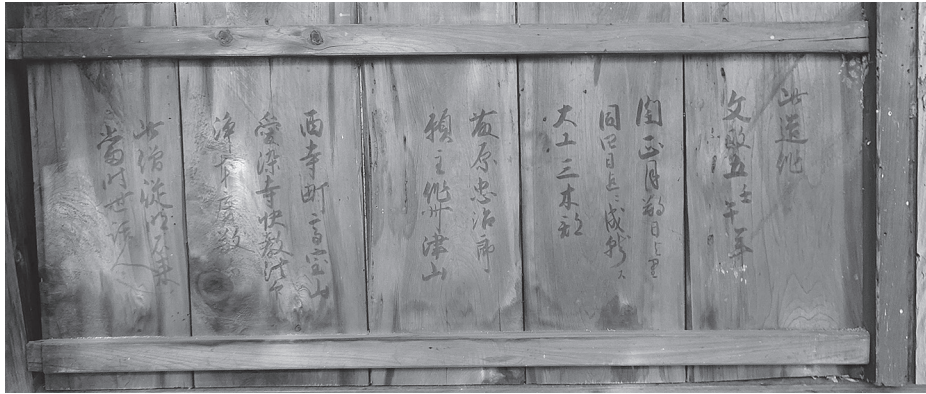


写真1 戸板裏書

大歳神社の絵馬にみる中国故事

向井 佑介

柏尾の大歳神社にある絵馬4枚のうち2枚には、中国風の装束を身につけた人物が描かれている。本書の報告番号にしたがうと、絵馬1の「吉備大臣・呉大尉玄東対局図」と絵馬2の「檀溪渡水図」がそれである。

絵馬1は「吉備大臣・呉大尉玄東対局図」と称され、養老元年（717）に遣唐使として入唐した吉備真備と碁の名手であった呉大尉玄東の対局の場面が描かれている。吉備真備の背後からのぞく幽霊は阿倍仲麻呂であり、椅子に坐して対局を観戦する人物が玄宗皇帝で、皇帝の椅子のうしろから顔をのぞかせている小型犬は、楊貴妃の愛犬と推定される。手前でお茶を出している女性は玄東の妻隆昌女で、対局のなかで玄東が負けまいと妻が碁石を隠したというストーリーが、近世後期の好華堂野亭『扶桑皇統記図会』にみえ、歌川国貞の浮世絵「金烏玉兎倭入船」にも「吉備大臣」「呉大尉玄東」「安部乃仲麿霊」「玄東妻隆昌女」が登場する。これらのもとになった説話は、平安後期から鎌倉期に成立した『江談抄』や『吉備大臣入唐絵巻』にみえるものの、ストーリーや登場人物は近世後期のそれと異なっている。

絵馬2は「檀溪渡水図」あるいは「玄德躍馬跳檀溪図」などと呼ばれ、三国志の英雄として著名な劉備玄德を描いたものである。後漢末、劉表のもとに身をよせていた劉備が襄陽で蔡瑁らに暗殺されかけた際に、「的盧」という馬に乗って檀溪を渡り、追っ手から逃れたという故事にもとづく。近世には、『三国志演義』をもとにした湖南文山による翻訳本の『通俗三国志』が元禄年間に刊行されてひろく読まれており、これに挿絵を加えた『絵本通俗三国志』も天保年間には出版されていたため、日本でもよく知られた題材であったことは間違いない。ただ、『絵本通俗三国志』に用いられた挿絵や、歌川国芳の浮世絵「通俗三国志之内 玄德馬躍壇溪跳図」、巖島神社の絵馬など、当時よく知られていた絵はいずれも大歳神社の絵馬と構図が異なっており、大歳神社例の系譜は明らかでない。

興味深いのは、「吉備大臣・呉大尉玄東対局図」と「檀溪渡水図」は、いずれも播州をはじめとする地域で祭礼に用いられる屋台彫刻の主題となっている例があり、それらを含めて系譜をさぐっていくことが今後の課題となるであろう。